

附 錄

石油發動機
船ノ話
關付

石油發動補助機關附漁船の話

二百艘余りの鯉船と、壹万人近くの釣子とある本縣の鯉漁業は、鹿兒島縣の漁業中最も大切なるものにして、其改良は亦大に肝要なり。而して其改良すべき所は甚だ多けれども、現今第一に必要に迫られ居るは、船の改良なるべし、毎年何艘と云ふ鯉船は暴風の爲め破船し、數十人の立派なる漁夫を海の底に沈むる事は、人の能く知る所なれば、更めて此処に述ぶる迄もなし。又年々鯉釣の曾根は遠くなり、従つて釣獲高は次第に減り、暴風に出遭ふ事も多くなるなり。

又漁場にありて鯉を釣る場合にも、艦の力にては鯉の群に追ひ付く事甚だ難澁にして、且つ之れを見付け合も少く、折角見出しては風上又は潮上にて、如何にも致し難く、大群を遁すこと往々あり。

即ち風や汐に頓着なく、自由自在に曾根に行き、又は沖合を走り廻りて、鯉の群を探がし、又は速く之れに追付き、充分釣上げて、いざ暴風と見るならば、大事に及ばざる内、安全なる港に入る事を得べき船を造らざるべからず。之れが爲めには、蒸気船若くは、石油發動機の船を造るの外な

し。

然るに蒸汽機關は、四五十噸以下の小さき船には適當せず、永き航海には多量の石炭を積まざるべからず。又出帆の時などは、餘程前より火を點つて機鑪を煮立て、船を止める時も、火を消して暫くは船止まらざる等の不便と不經濟あり、船を大きくする時は、鯉釣にも他の漁業にも適せざるに至るべし。石油發動機關にては此等の不便と不經濟なく、二三噸、四五十噸の小船に最も適當なるものなり。

石油發動機附漁船にても、追手風の時は勿論、帆を使ひ、風の無き時又は向風或は急ぐ時に機關の力を用ゆべきものなり。石油は一時間一馬力に付三合足らずの割合なり、故に三十馬力の船は一時間に八升の石油を費すべし、普通は六升か五升にてよろし、之れは自由に加減することを得るなり。機關の取扱は極く簡單にて、一人の機關士あれば充分なり。機關の響にて鯉は驚き近寄れざるべしとは、一般に心配する処なりしも、斯る心配は毫もなし。

純粹の石油發動補助機關附の鯉船即ちケツチ形若くはスクーナ形の

帆船に此機關を据へたるものは、茨城縣と静岡縣にて試験し、非常なる好き結果を得たる爲め、各地に續々新造せられつゝあり、本縣にても坊泊鯉漁業株式會社にては本場の監督の下に、此船を造らんとて目下注文中文なれば、何れ此船の出來て後、實地試験の上詳しき事は記すことゝなし、茲には此石油發動機附の船が、従來の船に優れる點の主なる二三を擧げ置くべし。

- 一、風の無き時又は向ひ風にても頓着なく出漁して、充分働き得こと
- 二、沖合廣く會根に鯉を探し、又は群に追付くに便なり。
- 三、二艘分三艘分位鯉を積むことを得べし。
- 四、釣りたる時は速に歸り、新鮮原料にて上等なる節を製り得ること。
- 五、暴風に遭ふこと少し。
- 六、船堅牢にして安全なり。
- 七、漁夫の苦しみを減し、全力を尽して釣魚に従事し得ること。
- 八、従來の船より漁夫を減し得ること。

明治四十一年二月廿二日印刷
同 四十一年二月廿八日發行

(非賣品)

鹿兒島縣水產試驗場

鹿兒島市鷹師町八十九番戶

印刷者 北川右之丞

印刷所 鹿兒島市山下町百七十一番地
鹿兒島新聞社